「はしがき」と「あとがき」の間で

この巻頭言を私は東京大学在職時代の巻末で書いている。すなわち退職前という状況でこの原稿を書いている。私は旧新聞研究所が旧社会情報研究所に改組された1992年度に、社会情報学を立ち上げるというプロジェクトへの参加を求められて、そこに移ってきた。転校と転職は習い性となっていたが、そのときの覚悟と抱負を「社会情報学への私の接続様式」というタイトルで所員の前で表明した。『社会情報研究所紀要』No.46、1993年、85-95頁に収録されている。それが東京大学という場での私の「はしがき」だった。その意味で私には史料価値がある。あれから14年間が過ぎたわけだが、その地点から果たしてどれだけ遠くまで来ることができただろうか。

私の夢は、社会情報研究所を世界水準の研究所とし、フランクフルト社会研究所の再来とすることだった。今だから、その夢をあっさりと打ち明けることができる。マックス・ホルクハイマーが戦後初代所長として再興した、戦前・戦中・戦後の歴史の光と影を抱えた、あの研究所。当時の知的世界に光芒を放った、あの『社会研究誌』。彼ら、フランフルト学派と総称される人々が同時代状況のなかで知的格闘をした対象と課題は、新しい社会情報研究所のそれと重なって私には見えた。私からすれば、新聞研究所とは〈新聞の研究所〉なのではなく、〈新聞研究の所〉なのであって、新聞研究とはいわばイデオロギー研究だったと言ってもよいのではないかと思う。その流れを汲み、その流れの先にある社会情報研究を構想し、批判的社会科学の一翼を担うインスティテュートとして、私は東京とフランクフルトの間に糸が張られているのを見た。いや、夢見た。ほかにもいろいろ所員はいるのだから、私の勝手の夢だったと言われれば、それまでである。

ついでに思い出すのだが、私は1976年頃ミュンヘン郊外のグレーフェルフィングにあった、荒廃した大きな屋敷に住んでいた。29歳だった。ヴォーンゲマインシャフトとして、友人たち数人で借りていた。広大な敷地には小川が流れ、秋には黄色い落葉で一面が厚く埋め尽くされた。乾燥した葉を蹴散らしながら歩くのは楽しかった。その中に古い3階建ての館が立っていた。それは新カント派の哲学者、ハンス・コルネリウスが住んでいた家だった。秘密警察の目を逃れて、闇夜にヘルベルト・マルクーゼはそこを訪れていたという。フランクフルト学派の人々の足跡と私はそのようにして遭遇した。

さて、「はしがき」と「あとがき」の間で何があっただろうか。「批判理論」に依拠したメディア・スタディーズの構想、公共圏概念の構成と吟味、ポリティカル・エコノミーの解釈、制度論のアプローチ、カルチュラル・スタディーズへの接続、そして撤収、ジャーナリズム・スタディーズへの転進、制度論的必要性からのプロフェッショナル論、ジャーナリスト教育の試行実験、そして管理職という名のポリティクスの実践など、見出し語的にはそのようなものが浮遊している。

しかし、初心に帰って、14年後の今日の同時代状況のなかで、そもそもいまどのような研究が可能なのか。なぜそのような研究が必要なのか。それはどのような方法で、どのような概念装置で行われうるのか。そして、どこに適切なフィールドを見出すことができるか。そうした問いに向き合わなければならない。その際、この研究組織を辞去するにあたってのことだが、思いつくのは、研究組織と研究領域と研究者の関係である。私は旧社会情報研究所ではメディア領域を、情報学環ではメディア・ジャーナリズム研究領域を担当してきた。その領域を専門にしようという院生たちを見てきた。彼らと議論をし、成果物を読んできた。この研究組織にあって、この研究領域は今後どうあるべきか。それは同僚の助教授、林香里氏によって引き継がれ、新しいスタイルと構想のもとで展開されていくに違いない。私はバトンタッチした。

私としては次のような感想を抱いている。情報学環あるいは学際情報学という広いアンブレラのもとにあって、メディア・スタディーズ、ジャーナリズム・スタディーズ、そしてカルチュラル・スタディーズはそれぞれどのような関係に立ちながら、批判的社会科学の一翼を構成していくのか。私はその三者を曖昧にオーバーラップさせず、区別すべきだと思う。融合や越境という要請に反するようだが、実はそれらには副作用もあって、衰弱の原因にもなることを見ておくべきだろう。区別するには強い意志と地味な努力が必要だ。何によって区別されるのかを考察しなければならない。そして考察の方法も必要とされる。それぞれの固有性は何なのか。何によって他から区別されるのか。そうした問への鮮明な動機をもった研究者を必要とする。

感想に留まっていて、残念ながら、いまの私には内容的に応える用意はない。管理職モードの頭をリセットして、また東京大学という場から離れて、いずれその試みに参加したいと思っている。今後、情報学環というインスティテューションにおいて教育研究組織と研究領域と研究者の間の、歯車の噛み合った、望ましい関係が作り出されることを期待したい。

花田達朗（はなだ　たつろう）

平成４年４月　東京大学新聞研究所に助教授として採用
（平成４年４月10日社会情報研究所へ改組）
平成７年４月　教授に昇任
平成15年４月　東京大学社会情報研究所長に就任
平成16年４月　東京大学大学院情報学環長に就任
（平成16年４月１日大学院情報学環へ組織換え）
平成18年３月　情報学環長の任期終了とともに東京大学を退職
平成18年４月　早稲田大学教育・総合科学学術院教授に就任し、現在に至る